

うに、他に比較する園が無いことから、これをごく自然に受け入れ、生活してきている。

○近くの園が合同保育だったので、それが当たり前のことのごく自然に受け入れてきた。幼稚部・保育部に分かれていることが、子どもに影響があるかかないかなど、特別に考えたことはない

○幼保一体が長いので、こんなものだと感じている。

## (2) 保育園児の情緒に及ぼす影響

幼稚園児の降園時あるいは夏期休暇が保育園児の情緒に及ぼす影響に関するアンケート調査の結果は次のとおりである。幼稚園児の降園時に保育園児が「寂しい」と感じている保育者は半数近くおり、「影響はない」を上回っている。保護者の意見をみると、「寂しい」「影響はない」は半々の結果である。夏期休暇中については、保育者、保護者ともに「寂しい」が上回っている。

クロス分析によって得た保育園児の情緒不安定に影響を及ぼすファクターとしては、i) 集団規模が大きい、ii) 幼稚園児が常に早帰りする、ii) 保育士・幼稚園教諭の勤務体制、iii) 都市化が進む地域、iv) 親の子育てへの関心が低い地域、を挙げることができる。

### ① 合同保育の良い影響と気にかかる影響

#### 1) 良い影響

合同保育が子どもに与える良い影響について、保護者に自由回答で尋ねたところ（D票-Q14）、子ども同士の関係に次いで、「多様な家庭環境を理解する」という記述が多くみられた。例えば次のような意見がみられる。

- 登降園の違い、両親が働いている、いないなどでそれぞれの家庭の事情が違うということを、無意識のうちに認識していると思う。「人はそれぞれ違うんだ」という個性を認める心が育つ助けになると思う。
- いろいろな環境に人がいると言うことを自然に理解し、差別せず個性を認められる
- いろんなお友達（家庭環境）がいることを実感できる。
- 個々の子どもが違う環境に育っていることを肌で感じ取れたり、お互いを理解する気持ちももてるようになる気がする。
- 様々な立場の子どもと接することにより、感じたり学んだりする事が多く、考えを拡げること役立つと思う。
- 家庭によって親の仕事、時間のリズムの互いは必ずあるのだと理解していける。
- 両親ともに働いている家もあり、そうでない家もあり…という状況を知る機会となること。
- いろいろな状況の家庭があり、それぞれ違った保育の仕方があるということを、何となく理解していると思う。
- 母親が家にいる家庭もあるということを小さい頃から知ることが出来ることと、いろいろな家庭があることを目の当たりに出来ること。
- 母親も仕事に出かける家庭があり、いろいろな家庭があることが、自然と理解することが出来た。

## 2) 気になる影響

しかし、一方で、合同保育が子どもに及ぼす気になる影響への保護者の自由回答（D票-Q15）でも、保育園児の情緒が多くとりあげられている。すなわち、幼稚園児の母親が迎えに来て早々と帰る場面を目の当たりにすることによって、保育園児が寂しかったり、うらやましかったりする気持ちが生じること、幼児はまだ各家庭の違いを受け入れられないこと、あるいは年齢とともに適応するとしても内面に葛藤を抱えていることが書かれている。さらに「親も胸が痛む」というような保護者の精神的負担についての記述も多い。

- 生活の違いはまだまだ理解できるはずはない。
- 年少組の時は、午後残ることに寂しさを訴えて、親としてつらかった。少し配慮が欲しかった。
- 幼稚園児の方が自由が利く（放課後お友達の家に行ける!）のは、羨ましいに決まっている。
- 先に帰る子、暗くなるまで園にいななければならない子とでは、わかっているつもりでも、寂しさを感じやすいと思う。
- 幼稚園児に比べて保育時間が長い、夏休みなどがない等ということについて、寂しい思いをしたり、何故?と思うことがある。
- 夏休み、春休みは登園したがない。
- 子どもがお休みの多い幼稚園児、早く帰れる幼稚園児を羨ましく思い、お迎えが遅いこと、休みが少ないことで寂しくて親を困らせる。親も子どものことを考えると悲しくて悩んでしまう。
- 子どもがお休みの多い幼稚園児、早く帰れる幼稚園児を羨ましく思い、お迎えが遅いこと、休みが少ないことで寂しくて親を困らせる。親も子どものことを考えると悲しくて悩んでしまう。
- 親からすれば仕事をしている場合、とても都合良くみてもらえるが、子どもから見れば短時と長時の差がつかなく、傷ついている場合があることを思うと、親としてもつらい部分である。
- 私のところは転宅により途中入園した。子どもにとって早くお母さんが迎えに来てくれることがすごく羨ましく、自分のところはお仕事をしているから遅くなると、言葉で説明しても子ども心は理屈で抑えることが出来ず、寂しい寂しいという思いでつぶされそうな期間が長く続いた。4歳でなんでも物事がわかるようになってからの転園だったので、よけいかもしれない。今は楽しく通っているが、親も子もつらい思いをしたので、結果的に幼保別の方が楽だった。おとなが「区別無く同じ保育を…」と理想を掲げても、実際現場で良いことばかりではないと思う。また保護者同士の間にも溝があったり、大変な園もあるようだ。
- 幼稚園児と一緒に降園できない自分は、母親にほったらかしにされていると思うことがある。降園後、幼稚園の友だちと一緒に遊べない。子どもは幼稚園のお母さん=いいお母さん、保育園のお母さん=悪いお母さん、と思っている

さらにこのことは保育園児の親だけではなく、幼稚園児の親も気にかけていることが、自由回答からはわかった。

○幼稚園児が先に帰るとき、早く迎えに来る親を見て寂しい気持ちになる子がいると思う。参観日等の後も同じことがいえる。我慢はしているが、幼心を考えると胸が痛い。

幼稚園と合同であることから、親子行事が多い園もあり、特に平日の行事の場合、保育園児の親は仕事が休めず参加できないこともあるということについても、記述がみられた。

○親が登園する行事（親子の集い、大掃除、草抜きなど）の時、保育園児の親が欠席のことが多い状況で、親と一緒にいる幼稚園児を見て、保育園児はどんな思いをしているのかなーと気になる。保育所なら境遇の似たもの同士だが、幼いだけにどれほど納得できているのかどうか。

一方で、数は少なかったが、幼稚園児の中にも保育園児が園で友だちと一緒に遊ぶことを羨ましく思う子どももいることが記述されていた。

○子どもは自分が幼稚園から帰っても保育園児はまだ遊んでいるので、いつもうらやましがっていた。

○お帰りの時間が違ったりするので、もっと友だちと遊びたかったのにと思ったりもするようだ（早く帰ることの場合）

## ②子どもの情緒不安への対応

合同保育実施園でのヒアリングで、このような保育園児の情緒の揺れ動きに対してどのような配慮をしているか尋ねたところ、子どもの理解を促すために親が働いていることを子どもにわかるように説明しているということであった。例えば自分も帰りたいたいという保育園児に対しては、「家に誰もいないので帰れない」ことを説明したり、親からも子どもに説明をしてもらうということであった。母親が職場に子どもを連れて行って、働いているということを理解させた、という事例もあったという。保育者の自由回答（C票-Q11-2）でも、母親が働いていることを子どもにわかりやすく話し、納得させるという保育者の意見が多かった。（以下波線内は、保育者の自由回答からの抜粋）、

○疑問を持つ子がいないように、保護者にも「親（母親）が働いているから長時間保育なのだ」ということを前もって話したり理解させたりしておくことをお願いしておく。また、いろいろな家庭があることを知らせ、自分が園に来ることの意味を知ったり、親が迎えに来るまで（仕事を終えるまで）皆で楽しく園で過ごそうという気持ちを持たせるよう接する。

○4月は理解できない子がたまにいるので、理由をわかりやすく話し、納得できるよう

にしている。

○長期の休み前などは、幼稚園部と保育園部の違いについて、子どもに話している。

○「お母さんはお仕事があるからね。がんばってね。」とやさしく声をかける。

○特にないが、寂しさを感じたとき、「お母さんは仕事がんばっているから、もう少し待っててね。○○ちゃんもがんばろう」と励ましたりする。

また、幼稚園児の降園場面を目のあたりにしないような配慮や、園での活動を充実させて楽しく過ごせるようにしたり、家庭的な雰囲気の中で安心して過ごせるようにする、子どもの気持ちを汲み取る、などが記されていた。

さらに、合同保育開始当初（3歳児、または4歳児）は寂しい思いをするが、次第に理解、納得するということが、むしろ多様な家庭環境があることを子どもが理解し、それぞれ異なる個性を認める心が育つことが、合同保育の良さであるという前述したような意見が保育者・保護者からともにみられた。

また、そのような配慮は必要ないという、次のような記述もみられる。

○昔は色々と気遣いをしていたが、子どもはそんなに気にしていないことがわかり、普通にしている。かえって幼稚園児の中には、永クエンにいたることが出来ていいね、とか、わざわざ保育所児（母親も仕事を探して）にかわった子もいる。

○特に配慮しなくても、影響はない。

しかし、子どもたちは本当に生活の違いを許容しているのであろうか。現実を突きつけられれば、子どもには変えることのできないその条件の中で生きていくために、適応せざるをえない。子どもたちが心から納得して多様な家庭環境のあることを許容しているのか、それとも表現しなくなっただけで心の奥底で寂しさを感じたり諦めたりしていないかについては、きめ細やかな検討が必要であろう。何故ならば、このような点は、“保育に欠ける乳幼児”に対する保育の根元に関わる問題であるからだ。保育園児にとって家庭に代わる生活の場である園は、くつろいでありのままの自分を表現できる場、自己主張ができる場でなければならない。合同保育が「地域の子どもに対して保育所・幼稚園の区別なく同じ保育を行う」という保育の共通性の強調のもとに実施されていることから、合同保育によって生じる“保育に欠ける子ども”の心揺れ動きや保育園児に固有のニーズに対する配慮が、意図的に行われにくい傾向が生じていないか、点検が必要であろう。

例えば本研究におけるケーススタディでは、午後の自由遊びの中で、保育園児が一番の仲良しとしてすでに降園した幼稚園児の名前を挙げ、「さみしい」とも答えている。保育園児は午前中とは関係や遊びを切り替えているが、仲のよい幼稚園児が先に帰ってしまうことによる「さみしさ」を、口には出さなくても抱えていることがわかる。さらに次のような場面もあった。

#### <事例10> 保育園児と幼稚園児が向き合って挨拶をする

一緒に集まりの会をし、最後に保育園児と幼稚園児が対面して立って並ぶ。どちらも

カバンを背負っており、降園する幼稚園児だけスモッグを着ている。担任保育者が「それでは、短時間児さん、長時間児さん、さようなら」と言うと、子どもたちもそれに合わせて挨拶をする。保育園児がくるっと向きを変えてホールの方に向かう。

訪問した3園ともに、基本的な方針としては保育園児と幼稚園児を分けずに保育をしている。ただしこの園では、帰りの会において保育者が子どもたちを「向き合わせる」という形で保育園児と幼稚園児の違いを顕在化させている。またこの終わりの会で、保育者は今後の園生活の予定を説明し、子どもたちに見通しを持たせているが、この時「卒園式が終わったら短時間さん（幼稚園児）はお休み。長時間さん（保育園児）はいつものように園に来る。」という説明をした。とたんに一人の保育園児から「いいなー」と幼稚園児をうらやましがる声があがった。保育者はその声を聞き流して、帰りの会を進めていく。さようならの挨拶の後、保育園児が給食の用意をしている最中、そのベランダの窓ガラス越しに、幼稚園児の母親が迎えに来て待っている姿が見える。

このような保育園児が抱く寂しさやうらやましいという思いに対して、保育者はそのひとつひとつの気持ちを汲んで対応していくことが求められよう。保育者にとっては過去に経験のあることであり、子どもも時間が経てば理解していくという見通しがあったとしても、個々の子どもの思いやことばを丁寧に汲み取って対応していくことは不可欠である。子どもが自分のおかれた環境に対してあきらめや不信を感じるのではなく、多様な家庭環境があることを理解し受け入れるためには、親に代わり依存できるおとなが必要であり、適切な養護的配慮が不可欠である。つまり、幼児にとって子ども同士の関係は重要だが、しかしまだ親に依存する発達段階にある。他児の親が迎えに来ることを目の当たりにすれば、親が恋しくなったり、寂しくなるのは当然の感情であろう。むしろ早く迎えに来て欲しいと主張するのは、健全な親子関係にあるからとも考えられる。保育園児が寂しいという気持ちやうらやましいと思うその気持ちを十分に表現できること、信頼するおとなからその気持ちを認められたり、共感されるという体験が必要である。このような“気持ちに寄り添われる”という過程を経て、初めて子どもは自己と他者を信頼することができる。親が働いているという現実を子どもに突きつけることだけでは、子どもは環境の違い自体は理解できたとしても、これを許容し受け入れることは出来ないであろう。

### ③保育園児の情緒に関わる要因

保育園児の情緒の揺れ動きについても、園によって、意見が異なっている。ここでは、保育園児の情緒に揺れ動きが少ないと保育者、保護者ともに感じている園は、どのような背景があるか、検討していくこととする。

幼稚園児の基本保育時間が保育園児と同じ8時間となっている園では、保育園児と幼稚園児の区別はないので、保育園児が特に寂しいと感じることはない。これは子ども同士の関係でも記した通りである。

また保育者の勤務体制が“別勤務”の方が、幼稚園児の降園時は安定するという結果を得られた。“同一勤務”の場合、保育者はローテーションで勤務するが、幼稚園児降園後は子どもの数が少なくなるため、クラスを合同にしたり縦割りにして、年長になるほど担

当保育者がクラスの子どもを午後まで一貫して保育を担当することが少なくなるようだ。このようなことが、保育園児の安定に影響を与えているといえよう。

合同保育実施園が平均 11 時間に及ぶ長時間保育を実施している実態からみて、一人の保育者がクラスの子どもの園生活全てに対応することは不可能なことであり、保育者の交代はやむを得ないことだ。しかし幼稚園児降園後はクラスの子どもの数が減少するため、合同保育クラスの担当はローテーションで低年齢児クラスに入ったり、あるいはクラスを合同にして、教材・研修の準備、記録、話し合い等のために保育者が抜けることが多く、結果として担当保育者と保育園児との午後の関わりは希薄になりがちだ。端的に言えば、保育園児に対しても、午前中 4 時間が基本保育時間、幼稚園児の降園後からは預かり保育、という感覚になっていないか、点検が必要であろう。実態調査や園のヒアリングによって、合同保育であることから保育者の負担は増加するという意見が多く聞かれた。事務・記録・研修が二重になることや、教材準備・話し合い等のための時間確保に苦労していることは想像に難くない。しかしそれを理由に担当保育者と保育園児との関係を希薄にしてはなるまい。保育園児の基本保育時間は 8 時間であり、実際にはもっと長時間を園で過ごしている子どもが多いことを考えると、保育者との一日を通した一貫したつながりはとても重要である。保育園児にとって園は生活時間の大半を過ごす場所であり、親に代わる担当保育者との親密な関わりが子どもには不可欠である。また、幼稚園児が降園したあとの保育園児に、自分だけが「残された」ような寂しさや情緒不安がおきないようにするためには、子どもと最も深い関係を形成している担当保育者が、その時間帯に保育園児の傍らにすることが重要である。

後に記すように、合同保育において保育園児の情緒安定を図るためには、幼稚園児の降園を境に午前と午後の保育を分断するのではなく、一日の生活をトータルにデザインしていくことが求められる。そのためにまず必要なことは、担当保育者が午前も午後も一貫して子どもたちを保育することができるシステムである。幼稚園児の降園と同時に担当保育者も不在になるということを極力少なくし、担当保育者が勤務中はできる限りクラスの子どもの関わりを優先するような体制を組むことが望まれる。つまりここで課題とすべきは、保育園児と担当保育者との一日を通した一貫した関係を、いかに確保するかであろう。

### (3) 保護者同士の関係

子ども同士の関係よりもさらに保護者同士の関係の方が、保育園同士、幼稚園同士で固まりやすく、また保護者同士の関係が、子ども同士の関係に影響を及ぼしているという一面もある。

保護者同士の関係に影響を及ぼすファクターを抽出したところ、i) 集団規模が大きい、ii) 幼稚園児の降園時間が“早帰り型”、iii) 都市化が進む地域、iv) 保護者の子育てへの関心が低い、となっている。

ここでは、保護者の自由回答をもとに検討していくこととする。

#### ①保護者同士の交流の難しさ

保護者同士の関係が難しい場合の理由として、自由回答からは次のことが浮かんでくる。

幼稚園の保護者同士は毎日子どもの送迎時に顔をあわせ、また降園後にお互いの家庭を行き来して子どもが遊ぶので、保護者同士の関係も親密である。しかし保育園児の保護者は送迎の時間が異なるため、日常、顔を合わせることはほとんどない。さらに園の行事で出会っても、幼稚園児の保護者同士ですでに親密なグループができており、疎外感を抱く保育園児の保護者もいるようだ。一方、幼稚園児の保護者の側も、幼稚園の親子のことは送迎時や家庭の行き来を通してよく知っているが、保育園の親子については同じクラスでありながらよく知らない場合が多く、戸惑いがあるようだ。

○幼稚園児・保育園児の保護者の交流がしにくいように思う。幼稚園の保護者は（ほとんど母親）毎日ほぼ同じ時間に送迎して顔を合わせ、声をかけあい、結束力も固いように思う。それに比べ保育園児の保護者たちは送迎時間がそれぞれ異なり、朝は職場へ夕方は家へと、常に時間に追われ、なかなか声をかけあうことができない。行事の時など、保育園児の保護者は、幼稚園児の保護者たちの輪に入っていくことができず、疎外感を感じる。以前、合同保育をしていない他市の保育所に通っていたが、このような疎外感を感じることはなかった。合同保育をして何のメリットがあるか、不思議である。何の意味も見いだせない。合同保育はしても、クラスは分けるべきだと思う。幼稚園と保育所の管轄も文部省と厚生省に分かれていることから、やはり別のものではないかと考える。

○お母さん同士の交流はかなり難しく、できれば別の方がいいと思う。

○保育園児のお母さんとは送り迎えの時間が違うのでほとんど交流が無く、役員の仕事も幼稚園児のお母さんにほとんど偏る。保育園児と幼稚園児が同じクラスというのは、親の立場から無理があると思う。（違うクラスなら良いと思うが）園全体としては合同保育になるのでは…

○親も全員が顔見知りというわけではないので不安がある。

## ②幼稚園児の保護者の負担の増大（父母会活動）

保護者同士の関係の難しい要因の二つ目として、父母会の活動が挙げられる。幼稚園では（特に私立）、親の協力のもとに行事が成り立っていることが多く、合同保育実施園の中にも親に協力を求めている園がある。しかし保育園児の保護者に時間的な余裕がないこと、また保育園児の保護者と幼稚園児の保護者とは生活リズムが異なり活動時間が合わないことから、幼稚園児の保護者に負担が偏りがちである。このことが幼稚園の保護者の不満につながっている。

○合同保育に反対はしないが、せめてクラスは別にして欲しい。理由：①降園時間が違うため。保育園児が幼稚園児と一緒に帰りたがる。②保育園児の保護者が幼稚園児の保護者に、役員関係のことを任せすぎで幼稚園の保護者の負担が大きい。

○同じ合同保育でも、保育園児の占める割合によってずいぶん違ってくると思う。なぜなら、保育園児の親は幼稚園児の親ほど親の会の活動に関わる時間のゆとりが内からである。ところが幼稚園には親の会の協力が合ってこそ成り立っているという面が多々ある。働くお母さんがどんどん増えていくにつれ、幼稚園としても充実させることの両立は難しくなり、保育者側の労力をもっと必要になるのではないだろうか。

○園の行事や役員など、保護者への役割や負担が幼稚園児の保護者の方に大きくなり、不公平感がある。（保育園の方は、仕事があるので、免除されることが多い）保育園児の割合が段々多くなっているの、そう思う。

○保護者の会の運営面では問題点がある。保育園児の親はあまり参加できない、しない。

○父母の会の運営が、幼稚園の父母の負担になっている。

○保護者の園の行事などの負担が、どうしても昼間家にいる母に回ってくる。幼稚園のお母さんと保育園のお母さんのバランスが難しく思う。

○役員をする時やお祭りなどクラスで作業するとき、どうしても幼稚園児の親の方が負担が大きい

○母の会とかの運営に、やはり時間の余裕のあるお母さんが選ばれ、負担が大きい行事にも「お仕事」と言われると、出てくださいと強くいえない。

## ③保育園児の保護者の負担（親子行事）

一方で、父母会活動や親子行事が活発なことが、保育園児の保護者にとっても負担となっていることがうかがえる。父母会活動への協力が負担となったり、逆に協力できない場合は気兼ねにつながっている。さらに、平日に休みがとりにくい場合には、園での親子行事に参加ができず、子どもに寂しい思いをさせているという精神的な負担も負っている様子がうかがえる。

○やはり幼稚園なので、休園することが多い。仕事を休まないといけないので、少し配慮して欲しい

○幼稚園がある関係で、親の会がほとんど勤務時間と重なっている。毎回休みをとるこ

とは不可能なので、親の会は保育時間終了後に持つなどできないのだろうか

○親の参加する行事が多く、また親の交流の場があったりで、仕事をしている親には厳しい。役員になるのもいいが、参加・貢献が幼稚園の親と同じで負担が大きいくしんど。そういう点での配慮を求めても、子どもの「幼保一元化」は親も「幼保一元化」という返事。それはとてもおかしいと思う。時間にゆとりのある（制限のない）幼稚園の親やパートの親にはできるだろうが、私にはとても負担だった、私は今年で下の子が卒園するので「もう少し…」「あと1年…」と耐えることが出来たが…という思いはある。幼保一元化はいいが、保育園の親に対する配慮は必要と思う。

○親が出席したり主体になってする活動が多く、どうしても保育園の親が協力できることが少なく、とても気を遣う。

○午前中に参観行事等が行われた後、幼稚園児のみ保護者と一緒に帰宅できるので、保育園児は寂しい思いをしていると思われる。

○行事に親が参加できない子は寂しそうに思う。

○他の保育園に比べ、行事や保護者の園に関わる時間が多いので、長時間の方は大変なことも在ると思う。

○やはり幼稚園なので、休園することが多い。仕事を休まないといけないので、少し配慮して欲しい○他の保育園に比べ、行事や保護者の園に関わる時間が多いので、長時間の方は大変なことも在ると思う。

#### ④子どもへの影響

このような保護者同士の関係や葛藤が、子ども同士の関係に影響を及ぼしているという意見もみられた。

幼稚園の保護者の自由回答には、保育園児の乱暴さや自己主張の強さについての記述がいくつかみられた。前述したように、園は保育園児にとって家庭に代わる場であり、くつろいで自己を表現する場だが、幼稚園児にとっては社会生活を学習する場である。そこで保育園児の自己主張の強さは、幼稚園児の側からみると、我儘、乱暴、と感じられることがあるようだ。また生活スタイルや生活リズムの違いが、相互理解を妨げているという一面もあろう。

このようなことについては、保護者同士の関係が親密であれば、理解、許容される部分が多くなるが、保護者同士の関係が疎遠な場合には難しい。

○やはり分かれている。それはそれで気の合う者同士のことでよいと思うが、親同士の確執も影響しているのでは？

○降園時間が違うため、子と子、親と親のつながりが少ないので、幼稚園と保育園に分かれてしまう。

○保育園児の方が長時間園にいるため、少し主のような感じで、幼稚園児は引いてしまうことがある。

○力関係では保育園児の方がかなり強く思う。物の貸し借りなど、保育園児の顔を見ながら貸して欲しくても一人で取り込んでいるので、なかなか怖くていけない（一部の人）

- 4歳のときは、保育園児の幼稚園児に対する軽い（たたく、ける、ことばなど）いじめのようなことがあった。
- 長期の休み前や毎日のお迎えの時など、保育園児がうらやましそうにしている、それが幼稚園児に対するいじめにつながる。
- 全員と言うことでなく、保育園児には愛情不足の子が多い気がするため、乱暴なことをされる。幼保関係なく、親に問題ありでしょうか。
- 保育園児の子は、親が働いているため、愛情面での気持ちが欠けているような気がする。すごくひねくれている子がたくさんいるような気がする。

### ⑤地域による相違

過疎地では、保護者同士も次のような良好な関係がみられる。

- 小さい町なので親同士の競争もなく、のびのびと園へは通わせてもらったように思う。

過疎地・少子化の地域では、保育園児と幼稚園児とを合同にすることによって、子ども集団がようやく存在するという地域の事情がある。つまり合同保育は、双方の子どもの発達に不可欠な条件となっている。このため、保護者の合同保育への評価は高く、保護者の間にも保育園、幼稚園という区別はない。そもそも過疎地域の場合には、保育所、幼稚園の区別以前に、地域住民同士としての関係が親密であり、保育所・幼稚園で保護者同士の関係が分かれることはないようだ。

また、幼稚園児の降園時間が“一体型”の場合も、保育所と幼稚園の明確な区別がない。“一体型”の園では幼稚園児の保護者に以下のような保育料についての不満はあるが、それが保護者同士の関係に影響を及ぼしている様子はいかがえない。なお、保育料については、園長の調査票でも、「保育料は幼稚園児も階層に準じて決められるので、保育時間の長い一部の保育園児に比べ、不平等感を感じている」と、記述されている。

- 5歳児にもなると、月謝が保育園と幼稚園ではほとんど違いはないのに、保育時間などが全く違うので、幼稚園の方が何故か損をしている気持ちになる。これは行政面だが。
- 同じ基準で保育料を払っているのに、子どもの待遇に差があるのはおかしい。（冬期、保育園児のみ延長ができておやつもある）待遇に差があるのなら保育料も一律にしないで、分けてほしい。
- 合同保育されていて少しの時間の違いで費用はすごく違うのはなんとなく不満である。それぞれに家の事情で預けなきゃならないとき、所得に応じてというのは納得できかねる。幼稚園のように一律払いにしてもらえれば尚よいと思う。

一方で、農地などに住宅やマンションが建てられ新たな人口が流入し、これにともなって保育所の入所待機児が発生しているという地域もある。このような都市化が進む地域の園では、保護者同士の関係は偏りがちで、合同保育に対する不満もみられる。合同保育の評価についても保護者と保育者との間のギャップが大きかった。

理由として、次のことが推測されよう。

- 1)人口流入地帯であり、地域住民同士の結びつきが希薄。
- 2)他市からの転入者が多く、他市で保育所のみを経験している場合には、親子共に戸惑い大きい。
- 3)生活リズムや生活スタイルなどで、保育園児と幼稚園児の家庭では差異がある。
- 4)流入人口は、身近に親族や地域からの支援をもたない場合が多く、園によるサポートをより必要としている。

このような地域では、子ども同士の関係よりもさらに保護者同士の関係の難しさが浮き彫りとなっている。

保護者同士の関係には、地域性がより強く反映されるといえる。

# IV. 合同保育に関する ケーススタディ

## IV. 合同保育に関するケーススタディ

### 1 研究の手順

IVでは、実際に合同保育を行う園に訪問して一日の保育の観察を行い、合同保育の具体的な実態を把握することにより、よりよい合同保育のあり方を検討することを目的としている。特に、アンケート調査からはわかりにくい保育の具体的な展開や子どもの様子をケースとして検討することが求められており、以下のような方法や手順で研究を行った。

#### (1) 観察対象園

対象とする園は3箇所定め、各園に研究の趣旨を説明し了承を得て観察を行わせていただいた。3園の選択にあたっては、公立と民間の両方が入ること、園の規模の違う園を選ぶことなどに配慮した。

(2) 観察時期 2001年2月19日～2月28日

(3) 観察時間 1日(早朝保育登園時～午後4時、ただし1箇所は午前10時から行った)

(4) 対象児 年長5歳児の1クラス(保育園児を中心に)

#### (5) 観察・記録方法

デジタルビデオカメラおよびフィールドノートを用いて日常的な保育場面を記述した。特に2台のデジタルビデオカメラを用いて、保育園児を中心に複数の観察者の視点から場面記述を行った。基本的には保育の流れには関与しない第三者的な視点から観察を行ったが、必要に応じて子どもとのかかわりも行った。観察後には、そのケースに関する討議を行い、場面の解釈等の検討を深め、トピック的な場面を通して本研究をまとめるという手順で進めた。

#### (6) 調査内容

##### ① 園の保育の特徴(保育の体制・環境・一日のプログラム)

合同保育実施園がどのような保育の体制(園児数・クラス数・職員体制)や環境(地域の実態・園舎の形態)において行われているかをアンケート調査において回答いただいた内容を実際に見たり聞いたりしながら、さらに補足的に調査する。また、一日の保育が実際にどのように展開されているかを生活の流れに添って調べる。

このような内容をフィールドワーク的に調査することにより、合同保育がどのような園の体制で運営されており、そのことが園児の実際の生活にどのような影響を及ぼすのかを調査する。

## ② 保育園児と幼稚園児の生活の姿と関係

また、保育園児と幼稚園児がどのように一緒に生活しているのか、保育園児が保育条件の違う幼稚園児と園生活を共にすることがどのような影響をもたらすか等について、早朝保育場面、午前中の保育場面、昼食時の保育場面、幼稚園児の降園場面、午後の保育場面と、保育の流れを追いながら記述していくこととする。特に保育園児と幼稚園児の関係性に着目しながら、具体的な保育の中の援助や環境構成を調べていく。

## 2. 観察対象園の概要

### (1) A園の概要

① 観察日時 2001年2月19日(月) 10:30~16:00

② 周辺地域の環境

大都市周辺の閑静な住宅街の中にあり、団地も多い。親の教育への関心度が高く、習い事をしている幼児も多いという地域環境である。

③ 園児数

保育所 園全体 105(定員90) 5歳児 32(定員18)

幼稚園 園全体 160(定員180) 5歳児 66(定員70)

5歳児クラス 33名、32名、33名の3クラス

園児数としては、観察対象園の中ではもっとも大規模である。特に5歳児は30人以上のクラスが3クラスとなっており、他の2園が1クラス20数人であることと比較するとクラス規模も大きいということになる。また、幼稚園児が保育園児の2倍であり、構成としては保育園児が少数派となる。

④ 職員構成

園長・主任(2)、常勤保育士(16)、非常勤保育士(4)、幼稚園教諭(6)、事務員(2)、調理員(4)、その他数名

この園では保育士と幼稚園教諭がまったく同じ勤務体制を組んでいる。幼稚園児が降園すると全職員でローテーションを組んで保育を行っている。つまり、幼児の担当保育者が乳児に入ったりするなどの形がとられることになる。このようなローテーションを組むことで、幼稚園教諭と保育士が同等に研修が取れるような体制が作られている。

⑤ 保育時間

保育所 開所時間 午前7時~午後7時

基本保育時間 午前8時~午後5時

幼稚園 教育時間 午前9時~午後1時50分

預かり保育 午後1時30分~午後4時

対象園の中では唯一幼稚園の預かり保育を行っている。保育園児とは基本的に別に保育がなれているが、おやつから一緒となる。観察日には、ホールにおいて体育講師がその場を担当し、サッカーをするなどの活動を行っていた。

また、観察日には保育園児の5歳児の中にも5名ほど午後1時帰りの子どもがいたり、途中で長時間児(保育園児)から短時間児(幼稚園児)に、あるいはその逆の変更などのケースもあるなど、保育園児と幼稚園児の境界線があまり明確ではないという特徴がある。

⑥ 園の環境

コの字型をした木のぬくもりのある園舎となっている。1階には0歳から3歳までの保育室があるほか、一時保育室やランチルームのほか、午睡室も設けられている。4歳児・5歳児の保育室は2階にあるが、幼稚園児の降園後は基本的にその保育室は使わず、食事や

おやつはランチルームで、午睡は午睡室で行うというシステムになっている。

環境図は別紙 1 - 1 参照。

#### ⑦ 観察日の一日の流れ (5 歳児)

観察したのは 10:30 以降なので、園長先生へのヒアリングの中でそれ以前の保育の具体的な内容についてお聞きしたものを含めてここに記録した。

- 7:00 ~ 8:50 早朝保育 (午睡室において、パズルやあやとりなどのコーナー遊びを行っていた。)
- 9:00 ~ 9:30 自主活動 (クラス単位で自由遊びを行う。この時期の 5 歳児は、自主的にマラソンを行うような活動を行っている。)
- 9:30 ~ 10:50 課題活動 (この時間帯は行事に向けた活動などの課題性をもった活動が行われている。この日はグループ活動として、紙すきや竹を実際にとってきてそれを素材にしての製作活動などが行われていた。)
- 10:50 ~ 11:20 自由遊び (課題活動を引き続き行っている子のほか、男児 7~8 人でサッカーを行ったり、園庭のポックリや竹馬などの遊具を使って遊んでいた。)
- 11:20 ~ 11:30 集まりの会 (保育室に帰ってきて、椅子を持って丸くなって座る。順順に自分の好きな場所に椅子を置いて座る。保育室を出て階段を下り、幼稚園児は靴箱に、保育園児はランチルームに直行し、自然と分かれていった。)
- 11:40 ~ 12:20 給食 (4・5 歳児がランチルームで一緒に食事をする。)
- 12:20 ~ 15:10 自由遊び (食事は終わった子どもたちは自分の好きな場で遊びを始める。多くの子は園庭で竹馬やポックリなどの園庭の遊具であそぶ。中には、保育者が洗濯物を干しているのを手伝ったりする姿なども見られた。)
- 15:10 ~ おやつ、自由遊び、降園

## (2) B 園の概要

① 観察日時 2001 年 2 月 20 日 (火) 7:30 ~ 16:00

② 周辺地域の環境

周辺は田園に囲まれており、自然環境豊かな環境に立地している。子どもたちが散歩で外に出たりすると、通りかかった地域のおじいちゃん・おばあちゃんが声をかけるような地域の結びつきは強い。子どもの兄弟数が多い家庭も多く、子育てに強い関心をもつような地域柄ではない。

③ 園児数

保育所	園全体	63 (定員 60)	5 歳児	14
幼稚園	園全体	20 (定員 30)	5 歳児	10
	5 歳児クラス	24 名	1 クラス	

B 園は 3 園の中でもっとも小規模の園である。5 歳児の人数も 24 名と 1 クラスの規模としては大きくない。また、保育園児と幼稚園児の比率は 1.4 対 1 で保育園児の方がや

や多い。4歳児もまったく同じ比率となっている。

#### ④ 職員構成

園長（1） 主任・教頭（1） 常勤保育士（6） 非常勤保育士（1）  
幼稚園教諭（1） 調理員（1） その他（1）

5歳児担当保育者は保育士採用となっている。一方、4歳児担当保育者は幼稚園教諭としての採用となっている。基本的には、それぞれの担当保育者が幼稚園降園後の午後の保育も担当するシステムとなっている。

#### ⑤ 保育時間

保育所 開所時間 午前7時25分～午後7時  
基本保育時間 午前8時30分～午後6時  
幼稚園 教育時間 午後8時30分～午後1時30分（水曜日は11：30分降園）

#### ⑥ 園の環境

保育園舎と幼稚園舎は別棟になっており、外通路でつながっている。しかし実際には、4・5歳児は8時30分から午後1時30分まで幼稚園児の保育時間の間は幼稚園舎において合同クラスで保育を受ける。園庭もかなり広く、築山やアスレチック風の木造の遊具があるなど、身体をたくさん動かして遊べる環境の工夫がなされている。

環境図 別紙1-2

#### ⑦ 観察日の一日の流れ（5歳児）

- 7：25～8：50 早朝保育
- 9：00～10：30 自由遊びから課題活動へ（はじめ、なわとび、あやとり、ブロックなど、保育室で好きな遊びに取り組んでいるが、次第に自分の活動を始める。この日は見せることになっている劇や踊りの準備をそれぞれのやる役割に分かれて行っていた。「さあ、みなさん」という形で始められるのではなく、個々が自然と自分の課題に取り組み始めていた）
- 10：30～12：00 散歩（3歳未満児も含め、全園児で海岸まで散歩に出かける。5歳児は途中で老人センターに寄ってかかわりを持った）
- 12：00～12：30 給食（ホールにそろって4・5歳児合同で食事をする）
- 12：30～13：10 自由遊び（園庭でたこをあげたり、鬼ごっこをしたり、「だるまさんころんだ」をしたりするような活動が見られた）
- 13：10～13：30 集まりの場
- 13：30～15：30 午睡（年長児はこの時期基本的には自由遊びとなるのだが、この日は3歳未満児と一緒に好きな場で午睡をした）
- 15：30～16：30 おやつ おわりの会

### （3）C園の概要

- ① 観察日時 2001年2月28日（水）7：30～16：00
- ② 周辺地域の環境

人口の増加している住宅地で保育所待機児童が多く、保育行政にも力を入れている地域である。親の教育への関心度は高く、祖父母が育児に協力したり、地域住民の結びつきが強い。

③ 園児数

保育所 園全体 96名(定員90名) 5歳児 19名(定員20名)  
幼稚園 園全体 49名(定員60名) 5歳児 24名(定員35名)  
5歳児クラス 22名・21名の2クラス  
規模的には中程度の規模といえる。

④ 職員数

園長(1) 主任(2) 専任保育士(9) 非常勤保育士(7) 幼稚園教諭(2)  
保健婦・看護婦(1) 調理師(4)

5歳児担当保育者は

⑤ 保育時間

保育所 開所時間 午前7時～午後7時  
基本保育時間 午前9時～午後5時  
幼稚園 教育時間 午前9時～午後1時40分(水・土は11時40分まで)

⑥ 園の環境

届出上は幼稚園と保育所の境界線が存在する。しかし、実際には幼稚園児がいる4歳児の1クラスは保育所側にあり名目上のものとなっている。

環境図は別紙1-3

⑦ 観察日の一日の流れ(5歳児)

- 7:00～9:00 早朝保育(8時までは乳児と一緒に保育室内でおもちゃを使ったり、絵を描いたりして遊ぶ。8時からは3歳以上児はホールに移動し、ホール内で跳び箱やなわとび、ゲームボックスなどを用いた幼児向きの環境が用意されており、そこで自由遊びを行う。)
- 9:00～10:00 自由活動(早朝保育からの幼児はホールから保育室に移動、幼稚園児も基本的に9時までに登園してくる。保育室で自由画帳に絵を描いたり、ピアノを弾いたり、コマを回したりして遊ぶ。)
- 10:00～10:30 合奏の練習(ホールに移動し、今度発表することになっている合奏の練習をする。ピアノ、木琴、大太鼓、タンバリンなどの各パートに分かれて、5歳児年長2クラス合同で行われる。)
- 10:30～11:30 自由活動(合奏の練習後、そのままホールでの自由活動となる。通常は園庭での外遊びの場合があるが、当日は雨天であったためホールだけの活動。ボール遊び、跳び箱などの身体を使った活動のほか、ままごとなどの遊びが行われる。)
- 11:30～11:40 集まりの会(水曜日のため、幼稚園児は早帰りとなる。この集まりの場では明日以降の予定のことなどについて保育者が話をする。最後はこれから帰る幼稚園児と残る保育園児が向き合って「さよなら」のあ

いさつをする。)

11:40～12:30 給食

12:30～15:00 自由遊び(保育室でパズルや、トランプ、男女が一緒に場作りをして  
ごっこ遊びなどをして過ごす)

15:00～ おやつ 降園